

オホーツク管内における セグロサバクヒタキ *Oenanthe pleschanka* の初記録

石橋 隼

099-2493 北海道網走市八坂196, 東京農業大学生物産業学部

First record of Pied Wheatear *Oenanthe pleschanka* from Okhotsk Subprefecture

ISHIBASHI Hayato

Tokyo University of Agriculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2493, Japan. hayatoyume1484@gmail.com

Keywords Pied Wheatear, *Oenanthe pleschanka*, Abashiri City, Hokkaido, first record

はじめに

セグロサバクヒタキ *Oenanthe pleschanka* は、ヒタキ科 Muscipidae の鳥類である (日本鳥学会 2012)。本種の分布域は、ロシア南部からトランスカスピア・トゥルクスタン・中国北西部・モンゴルで繁殖し、冬季はアフリカ東部・アラビア半島で越冬する (五百沢ら 2004)。

国内における本種の記録は、利尻島、本州、飛鳥、舳倉島、隠岐、見島、対馬で記録がある (真木ら 2014)。また、北海道における本種の確実な記録は、前述した 1991 年 4 月 28 日の利尻島における雄夏羽の記録のみである (小杉 1991; 藤巻 2012; 藤巻 オンライン)。ただし、北海道鳥類目録改訂 4 版 (藤巻 2012) に記載はないが、2016 年 5 月 7 日の礼文島において本種と考えられる記録がある (今堀 2016)。以上の記録に加え、オホーツク圏鳥類目録 (日本野鳥の会オホーツク支部 オンライン) においても本種の記録はないことから、本種のオホーツク管内初記録として本稿に記録する。

記録

筆者は、2023 年 5 月 10 日 15 時から 17 時および 11 日 9 時から 12 時に、北海道網走市駒場の網走港南東部に広がる砂礫海岸 (44°00'20"N, 144°17'11"E) において本個体を確認した。本個体を観察した 10 日および 11 日の主な天候は、曇りや雨であった (気象庁 オンライン)。本個体を観察した環境は、砂礫と岩礁で形成された砂礫

海岸である。海岸の東側にはオホーツク海が広がり、西側にはハマニンニク *Leymus mollis* が優先する草地がある。また、北側には公衆トイレがあり、その周辺には草地が広がっている。筆者は、本個体の観察に 10 倍の双眼鏡を用い、撮影には焦点距離 600 mm の望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラを用いた。なお、5 月 6 日と 12 日以降も観察を行ったが、本個体を確認することができなかった。

本個体の大きさは、同所にいたハクセキレイ *Motacilla alba* より一回り小さく、ノビタキ *Saxicola torquatus* より一回り大きかった。本個体の特徴は、額から後頸は白色で、一部の羽毛が灰褐色や茶褐色であった (図 1, 2)。眼先から頬、喉にかけて黒色であり、後頸から上背は黒色であった (図 1)。翼羽の大部分は灰褐色で摩耗していた (図 2)。なお、肩羽の一部や小雨覆は黒色であった (図 2)。胸から下尾筒にかけての下面と、腰から上尾筒にかけては白色であった (図 1)。なお、腰の白色部は最も短い三列風切の先端部より広がっていた (図 2)。尾羽は白色と黒色になっており、中央尾羽の約 2/3 が黒色で、最外側尾羽では約 1/3 が黒色であった (図 2)。また、中央尾羽と外側尾羽の間の尾羽は約 1/8 が黒色であったことから、逆向きの T 字型または山型に見えた (図 2)。虹彩、嘴、脚の色は黒色であった (図 1)。

以上の大きさや特徴から、本個体はサバクヒタキ属 *Oenanthe* の一種であると考えられる (Svensson et al. 2009)。サバクヒタキ属のうち、本個体の特徴である

額から後頸および下面が白色で、眼先から喉、後頸から上背および翼にかけて黒色である特徴を持つ種は、セグロサバクヒタキ、キプリサバクヒタキ *O. cyprica*, カワリサバクヒタキ *O. picata*, コシジロサバクヒタキ *O. lugens*, アラビアサバクヒタキ *O. lugentoides*, シラガサバクヒタキ *O. monacha*, セグロサバクヒタキとカオグロサバクヒタキ *O. hispanica* の交雑個体群とされる *O. b. melanoleuca* のいずれも雄夏羽である (Svensson 2011; Shirihai & Svensson 2018). 以下では、各種の雄夏羽の特徴と本個体の特徴について比較を行う。キプリサバクヒタキは、胸から腹にかけてバフ色がみられる点や (Svensson et al. 2009; Shirihai & Svensson 2018), 腰の白色部は中央または最も短い三列風切先端と同じ位置である点から (Shirihai & Svensson 2018), 本個体の特徴とは異なる。コシジロサバクヒタキは (亜種 *O. l. warriar* は除く), 下尾筒が褐色またはバフ色を帯びる点や、風切羽に白斑が見られる点から (Svensson et al. 2009; Shirihai & Svensson 2018), 本個体の特徴とは異なる。アラビアサバクヒタキは、腹から下尾筒まで褐色やバフ色がかかる点から (Shirihai & Svensson 2018), 本個体の特徴とは異なる。シラガサバクヒタキの場合、顔から上胸まで黒色部がある点や (del Hoyo 2005), 尾羽の黒色部が中央尾羽と最外側尾羽の一部である点から (Svensson et al. 2009; Shirihai & Svensson 2018), 本個体の特徴とは異なる。カワリサバクヒタキのうち “*capistrata*” タイプは、セグロサバクヒタキと類似している (del Hoyo 2005). ただし、尾羽の黒色帯の幅はセグロサバクヒタキより狭く、最外側尾羽の黒色も薄いとされている (del Hoyo 2005; Shirihai & Svensson 2018). また、頭頂の白色部はセグロサバクヒタキよりも狭い範囲とされている (Shirihai & Svensson 2018). しかし、本個体の尾羽の黒色帯の幅はカワリサバクヒタキの “*capistrata*” タイプより広く、頭頂の白色部の幅もより広かったため、本個体の特徴とは異なる。セグロサバクヒタキの場合、額から後頸が白色である点、胸から下尾筒、腰から上尾筒にかけても白色である点があり、以上の特徴は本個体の特徴と一致する (真木ら 2014). また、尾羽の白色と黒色の配色が逆向きの T 字型に見える点や、本種の中央尾羽の先端は 2/3 が黒色である点も本個体の特徴と一致する (五百沢ら 2004). なお、本種の後頸から上背、翼にかけて黒色である

が (五百沢ら 2004), 本個体の肩羽の一部や小雨覆を除く翼羽全体が灰褐色であったのは、未換羽の羽毛が摩耗して褪色したものであると推測できる。 *O. b. melanoleuca* は、セグロサバクヒタキとの識別が困難な場合もあるとされている (Svensson 2011). しかし、セグロサバクヒタキを除く類似種の分布域は、全てカスピ海および中近東以西であることから (del Hoyo 2005; Svensson 2011; Shirihai & Svensson 2018), 日本への自然渡来は考えにくい。さらに、本個体には籠脱けを示唆するような顕著な羽毛の摩耗や損傷、嘴や脚の瘤が見られなかった点から、本個体が逸出個体である可能性は低く、野生個体であると考えられる。以上の形態的特徴や分布域から、本個体をセグロサバクヒタキの雄夏羽であると同定した。なお、本種には “*vittata*” とされるタイプがあるが、このタイプの雄夏羽は喉が白く、額の黒色部の範囲が本個体より小さい点から (del Hoyo 2005; Svensson et al. 2009; Shirihai & Svensson 2018), 本個体は “*vittata*” タイプではない。また本種に亜種は記載されていない (Gill et al. 2023).

次に、本個体の年齢を羽衣の特徴から推定する。本種の雄夏羽の成鳥は、雨覆は黒色である点や、翼は黒褐色である点があり (Svensson 2011), 以上の特徴は本個体の特徴とは異なる。本種の 1 年目または 2 年目の春は、雨覆と翼羽は灰褐色である点や、翼羽は相当摩耗している点があり (Svensson 2011), 以上の特徴は本個体の特徴と一致する。また、本個体の額や頭頂の一部に灰褐色や茶褐色の幼羽が残っていた点や、上背や翼羽の大部分に灰褐色の摩耗した幼羽が残っていた点から、第一回夏羽であると考えられる。よって本個体の年齢は 1 年目である。

以上の鳥類の学名は日本鳥学会 (2012) に準拠し、記載のないものは白井 (1992) に準拠する。

本個体の観察した行動は、主に砂礫海岸にある大きな石の上や流木の上など、比較的高くて見通しの良い場所にとまることが多かった。そして、海岸にいる小動物を発見した直後に、高い場所から降りて採餌する行動を繰り返していた。また、石や流木の上では、時折尾羽を上下に振るような動作をしていた。時折ハマニクが優先する草地や公衆トイレ付近の草地へ移動し、そこでは昆虫の幼虫を捕食していた。11日には、公衆トイレ付近の草地に縄張りを持つノビタキから威嚇される



図1. 北海道網走市で観察されたセグロサバクヒタキ (2023年5月10日石橋隼 撮影).

Fig.1. The Pied Wheatear *Oenanthe pleschanka* observed in Abashiri City, Hokkaido. Photographed by H. Ishibashi on 10th May 2023.



図2. 北海道網走市で観察されたセグロサバクヒタキの上面 (2023年5月10日石橋隼 撮影).

Fig.2. Top surface of Pied Wheatear *Oenanthe pleschanka* observed in Abashiri City, Hokkaido. Photographed by H. Ishibashi on 10th May 2023.

姿を確認することができ、その際に本個体は「ビビッ」といった鳴き声を発していた。

観察方法

本個体が本来の分布域とは異なるオホーツク管内へ出現した迷行のメカニズムは、渡りの方向は正しいが、通常は止まるべき場所を飛び越えてしまう現象である、over shootingによるものであると考えられる(先崎ら 2019)。また、2023年5月10日および11日の網走市の天候は曇りや雨などの悪天候であったが、12日以降は晴れであった(気象庁 オンライン)。以上より、本個体は渡り途中に悪天候に見舞われ、一時的に当地で滞在したものであると考えられる。

謝辞

本稿をとりまとめるにあたり、日本野鳥の会島根県支部の安食一歩氏、日本野鳥の会オホーツク支部の川崎康弘氏および城石一徹氏には文献収集にご協力頂き、お三方には深く感謝申し上げます。

引用文献

- del Hoyo J, Elliott A & Christie D. A. (eds.). 2005. Handbook of the birds of the world. Vol. 10, Cuckoo-shrikes to Thrushes. Lynx Edicions, Barcelona.
- Gill F, Donsker D & Rasmussen P (Eds). 2023. IOC World Bird List (v13.2). <https://www.worldbirdnames.org/new/>, accessed 2023-12-11.
- 藤巻裕蔵. 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 藤巻裕蔵. 北海道鳥類目録・改訂4版の補遺. <http://bonasa4979.sakura.nc.jp/list.html>, 2023年12月17日閲覧.
- 今堀魁人. 聖なる鳥の島と花の浮島を巡って ヨーロッパコマドリ, セグロサバクヒタキなど130種. 2016. 北海道野鳥だより(186): 6-9.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸. 2004. 日本の鳥550山野の鳥増補改訂. 文一総合出版, 東京.
- 気象庁. 網走 2023年5月(日ごとの値) 主な要素. https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_s1.php?prec_no=17&block_no=47409&year=2023&month=5&day=10&view=h0, 2023年12月5日閲覧.

- 小杉和樹. 1991. 利尻島で観察された稀少種の記録. 日鳥学誌 40: 36-40.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会オホーツク支部. オホーツク圏鳥類目録. <http://www.wbsj-okhotsk.org/zukan/frame.html>, 2023年12月5日閲覧.
- 真木広造・大西敏一・五百沢日丸. 2014. 決定版日本の野鳥650. 平凡社, 東京.
- 先崎理之・梅垣佑介・小田谷嘉弥・先崎啓究・高木慎介・西沢文吾・原 星一. 2019. BIRDER SPECIAL 日本の渡り鳥観察ガイド. 文一総合出版, 東京.
- 白井祥平(編). 1992. 世界動物名検索大辞典[第I期]世界鳥類名検索辞典・和名篇. 原書房, 東京.
- Shirihai H & Svensson L. 2018. Handbook of Western Palearctic Birds Vol. 1. Helm, London.
- Svensson L. 2011. ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド. 村田 健訳, 尾崎清明・茂田良光監訳. 文一総合出版, 東京. (原著: Svensson L. 1992. in English).
- Svensson L, Mullarney K & Zetterström D. 2009. Collins Bird Guide. Second edition. HarperCollins, London.